

“杉原先生ならきっとこのように考えられる”——杉原先生と私

一九六八年に発足し、杉原先生をはじめ田中真晴、佐藤金三郎、平田清明の諸先生が最新の議論を披露された経済原論研究会で杉原先生を遠くから仰ぎ見る機会があったが、先生に直にお話してできるようになったのは、私が名古屋大学大学院の修士課程を修了して、一九七一年の春に関西大学経済学部助手として赴任してからである。杉原先生はちょうど一年前に甲南大学に移られていたが、先生がながらく講師として関西大学の大学院に出講されていたこともあって、私がマルクス研究を出発点として研究者の道を歩む折々の重要なきに、先生から励ましやアドバイスをいただいた。

懐かしい思い出としてやはり食事のことがあります。一九七五年に杉原・佐藤編『資本論物語』（有斐閣）が刊行されましたが、その企画や項目づくりのお手伝いをする機会がありました。七三年の四月上旬の日曜日に、梅田の新阪急ホテルで重田先生や細見英先生も参加されて、企画会議がありました。その後なにか美味しいものをいただき、ビールを飲んだような気がします。重田先生や細見英先生がいつになく緊張されていたこともおかしかったのですが、杉原先生が「夙川の川辺でたくさんの家族が桜を楽しんでいましたが、若森さんの家族に迷惑をかけませんでしたか」と言われ、心模様を言い当てられたようでびっくりしました。また、大学院での講義の最終日に受講生一同が阪急千里山駅に近い大同門で焼き肉を腹一杯ごちそうになりました。杉原先生もなかなかの健啖家だと感じましたが、忙しいなかで院生をもてなして食や会話を楽しむ先生に感心しました。

若い頃の私は、温厚で柔和にみえる杉原先生から厳しい言葉をいただきびっくりしたことがあります。私が助手一年目（博士課程一年）に「経済学批判要項における労賃論」の原稿を書き杉原先生に読んでいただいたとき、「これはあなたがプロとして初めて書く論文です。そのような覚悟で書いていますか」、と問われました。そのときの厳しい顔をいまでも覚えています。杉原先生に認めていただけるような論文が書けたのは一九七六年のマルクスの利潤率の傾向的低下論でした（杉原四郎『西欧経済思想史研究』同文館、第一四章）。その後私は一九八四から八五年のフランス留学で学んだレギュレーション理論につながるかたちでマルクス研究をまとめた著書『資本主義発展の政治経済学』（関西大学出版会、一九九三年）を刊行し、この研究で関西大学から学位を得ました。この著書と学位授与を周囲でいちばん喜んでくださったのが杉原先生でした。「関西大学大学院においてマルクス研究で博士号を獲得したのはあなたがはじめてでないか」という葉書をいただきました。また、『図書新聞』（一九九三・八・七）の「九三年上半期アンケート」で拙著を「スケールの大きい野心作」として取り上げていただきました。

杉原先生の学問に対する姿勢やお人柄は、私の助手時代（大学院の後期課程）の指導教授で初期マルクスの『『経済学ノート』などの杉原先生との共訳の多い重田晃一先生をとおして、「こういう状況では杉原先生ならきっとこのように考えられる」というかたちで伝えられました。例えば、私が研究史のサーベイ論文を執筆しようとしていたとき、重田先生

が「サーベイではアイデアが勝負だ」と言われ、杉原先生の見事な研究史のサーベイの基礎にあるアイデアに目を向けるようになりました。また、関西大学では学生数の多い他の私立大学と同じように、さまざまな行政職があつて、若いときから数年に一度はかなり忙しい行政職を努めなければなりません。私が重田学部長のもとで学生主任を担当していたとき（助教授になったばかりの三一歳の頃）、「民族差別」をめぐる大きな学内問題に日夜対応する時期がありましたが、その折、重田先生が「杉原先生は学部長などの行政職をされているときは論文を書かれていないかもしれないが、必ず書評をいくつか書かれている。研究を継続されていた」と言われ、はっとしたことを覚えています。そしてこの民族問題に直面したことがきっかけになって、「マルクスと第三世界」という、私の三〇代の研究テーマが生まれました。

『関西大学経済学部創設100周年記念誌』第三編「回想の経済学部」のなかに「杉原四郎名誉教授に聞く」という項目があります。杉原先生はこのなかで、関西大学では経済原論や教養の経済学を担当したが経済学史は一度も講義したことない、とやや意外な事実をあげられ、さらに若干三〇歳で教授に昇進されて以来創設期の関西大学経済学部の運営に参画してきたことをのべています。若い頃から行政職をこなされ、国立大学の倍近い講義を担当されていた杉原先生がそのような学内事情を少しも感じさせない明朗明瞭な風貌で学会や研究会で活躍され、多数のすぐれた研究成果を残されたことは、私立大学で教育研究に携わるものにとって驚きであり、励ましです。先生の学恩に深く感謝しつつご冥福を祈ります。

（『環』藤原書店、2009年）